

第8回高等学校改革プラン推進委員会（第三推進委員会）議事録

- 1 日時 平成17年9月22日（金）午前9時00分～午後0時00分
- 2 場所 長野県諏訪実業高等学校 会議室
- 3 出席委員

池上 昭雄委員長	熊谷 秀男委員
笠原 伸二副委員長	川島 一慶委員
岡庭 一雄委員	丸茂 貴子委員
小林 辰興委員	関 哲夫委員
小口 武男委員	北原 秀樹委員
北原 曜委員	藤本 功委員

4 開会

（野村主幹教育支援主事）

本日は大変お忙しい中お集まりいただきましてありがとうございます。

それでは委員長、よろしくお願いいたします。

（池上委員長）

皆さん、おはようございます。

それでは第8回の会議をはじめたいと思います。恒例によりまして、開会にあたりまして、まず、今日の日程をご説明したいと思います。

（野村主幹教育支援主事）

今日は、これから9時から12時まで会議をもつていただくわけですが、その後、本日は諏訪実業高校を会場としてお借りしてありますので、およそ12時10分位からになるかと思いますが授業参観ができます。学校の職員の方にご案内していただきます。12時45分ぐらいから、これは授業が終わるころですので、校長室で昼食をおとりください。お弁当をご持参の方もできるかと思います。それから、1時25分ごろから、学校概要説明ということで、諏訪実業高校のことについていろいろご質問いただいたりすることができるかと思います。それが2時ぐらいには終了という予定になってございます。

委員の皆さまには、これから申し上げることはご案内してないのですが、実はその後、岡谷工業高校も見えていただくことができるというように学校のほうにご依頼してございますので、またご希望がございましたら、岡谷工業高校も視察できるというふうになっています。その後、私、野村がご案内したいと思いますので、できるだけそちらのほうもご参加いただくように思います。

日程については、以上であります。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは最初に、他の委員会の状況についてご説明をいただき、それから、今日の、ご提出をいただいた資料についてご説明をいただく。それから、委員の皆さまで、高校をご視察をするのにいただいてあるやにうかがっていますので、そんな点につきましてご説明がお願いできたらいいのではないかと考えています。

それを経まして、いよいよ本題に入っていきたいと思います。このように考えていますので、よろしくお願いいたします。

それでは、資料説明並びに他地区推進委員会の状況等事務局からお願いします。

5 資料・他地区推進委員会の状況説明

高校教育課野村主幹教育支援主事から説明 【説明内容省略】

(池上委員長)

ありがとうございます。

ご提出をいただいた資料の中で、ご質問がございましたら、どうぞお出しください。

(小林委員)

資料4です。A高校のコース制の例という資料のところですが、2の欄です。後半のところに、「A高校では、3学級規模でコース制をとり」という3行目のところに、「増加時間は、学校の努力や新たに講師を採用することで対応してきた」。ここですが、「学校の努力」というのは具体的に言うと、持ち時間の増加以外のことがあるのかどうか。それが一つです。

それからもう一つは、この講師というのは加配なのかそうではないのか。それからいわゆる非常勤なのか常勤なのか。非常勤というのは時間だけですよね。

さらに、2学級規模の場合のコース制導入ということについて、同じようなコース制を維持しようとするという、これ以下のことは2学級規模の場合のことなのか、つまりこの資料でいうと、前段のところでは2学級でもコース制はできるが、問題があるというところをえ方をしていると思うのですが、2学級規模でコース制を維持するときの絶対的な条件のようなことをちょっと指摘したい。

以上です。

(野村主幹教育支援主事)

はい、お答え申し上げたいと思います。3学級規模において、その学校の努力ということですが、当然、時間増ということになりますので、先生方の時間が増えることは察してございます。そのほかに、時間割の組み合わせ等もありますので、その克服が大変なものになるかなとは思いますが。

それから、講師の方についてでございますが、基本的には時間数で加配がございます。従って、非常勤講師という形になります。

それから、説明が長くて申し訳ございませんが、あとのほうの質問につきましては、2

学級規模のこととして考えてございます。当然、2 学級規模でコース制をとろうとすると、いろいろな部分で、さらにまた、よりその工夫をされますので、先ほど申し上げましたようにちょっと単純化しまして、無理やりこのコースを2 学級でやるとすればどうなるかと考えたわけでございます。従いまして、そのコース制を維持していくためには、講座の種類減少を余儀なくされるとか、先ほども申し上げたようなことは起こってくるということでございます。

よろしいでしょうか。

6 議事

(池上委員長)

ありがとうございました。

ほかにございますか。

それでは、審議に進みたいと思います。高校の視察をいただいた皆さんから、簡単に報告がございましたらお願いしたいと思います。

北原曜委員、視察に行かれましたでしょうか。

(北原曜委員)

下諏訪向陽に行きました。

教員の先生方も、習熟度別でだいぶ苦勞なさって、いろいろ授業をなさっているのが非常に印象的でした。それから、やはり普通科の習熟途上校ということで、以前、この委員会と一緒に見ました松川高校と似たようなところがかなり感じられました。

以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ほかにございますか。

それでは、私が、公開で上伊那農業高校の全日制と、それから夜分になりますが、定時制を上伊那農業と、赤穂高校に参上いたしましたので、内容をご報告申し上げます。

まず上農でございますが、一言で言いますとやはり上伊那の農業をリードしているんだと、そのように強く感じました。特に、担当される先生方の姿勢というのは、当然生きとし生きるものを対象にしておりますので、大変ご熱心でございまして、何日かおうちに帰らなくて生きたものの世話をするとかというふうな姿が散見されまして、生徒が必ず背中を見ているのだというように、やや浪花節的でございますが思った次第でございます。生徒も、比較的、実習という姿が多いと思いますが、それは真剣にやっているのだというように感じてまいりました。

それから定時制でございますが、ここは正直な話、見れば見るほどやはり問題だなという認識を持ちました。まず概要を申し上げますと、50 数名の生徒に、先生はだいたい 10 名程度でございますが、ざっと言いますとそういうことです。

授業の内容につきましては、程度につきましては、私も専門でありませんので詳細はわかりませんが、生徒の進学状況を見てまいりますと、先ほど北原曜委員がおっしゃった

のですが、かなり苦勞されてやっておるのではないのでしょうか。特に、居場所問題がその中心にあるんだなというように私は感じました

それから赤穂高校でございますが、昨晚見せていただきました。赤穂の場合は生徒が70名以上いるわけでありまして、先生方もそれに沿った十数人ということでございました。率直に言いまして、北原曜委員の表現の仕方、いわゆる習熟度というような話をしてみますと、赤穂のほうが少し高い、少しという意味ではなく、そこそこ高い数字にならないか。また、就学の状況も、下伊那で皆さんと參觀をいたしました学校の水準の中クラスのところに習熟度というのはあるのではないかというふうに見ているわけでありまして、この場合は、もちろん居場所ということも内在しておりますけれども、ここは就学をしっかりとされているということでありました。また4年生は、いわゆる不登校という皆さんが、入学時は多かったようでありまして、4年になりますと、ほとんどの皆さんがいわゆる勤務をしながら通学をするというふうな姿が定着しております。

以上に考えておりまして、少し定時制の強化をその時点では必要だと感じました。ただ、両校とも先生方はそれなりに、大変なご苦勞があるんだなというようにしみじみと思ってまいりました。感想を申し上げておきます。

以上でございます。

ほかにございますでしょうか。

では、そこはそのくらいにさせていただいて、次に移りたいと思います。

それでは、今後の進め方について、私のほうから見解を先に申し上げてご協力をいただきたいと思います。

財政や、地区割りということにつきましては、これまで一定の議論が終わりまして、次にはいよいよ「魅力について」というところで単発的にやってみりましたが、高校改革プラン検討委員会のほうから『最終報告』というものが出ておりましてのと、いろいろを含めまして、県立高校の再編整備候補案というのが県から提出されました。これはご承知のとおりです。候補案の中で、『最終報告』のうちから総合学科、多部制・単位制を採用して、今度は事務局のほうからいろいろな説明しているので、確認をしてみたいと認識をしています。

しかし、その他の職業科、普通科等々よりは減級をその段階ではしてございます。委員のほうからはそれぞれお出しをいただいておりますが、そんな資料のご提出をいただいたものと私は思っております。今後、一般社会の要望等を取り込んで、どのような点が議論されるのかということに相成ってくるのだというふうに想像していたのです。

進め方でございますが、第3通学区、当区におきましては、内容についてはさらに、全体として踏み込んだ議論をまずしなければならないと考えておりまして、まずは、最小でも県の提案する総合学科、多部制・単位制、それから地域校等々について、そのありようをまず詰めていかなければならないと考えておりまして、先に、従いまして、従来ご説明をいただいた内容に加えて、さらに詳細なご説明を事務局からちょうだいするというふうをお願いをいたしたいと思います。

その理由でございますが、少なくとも候補案に記載された学科に関する記載が、我々に十分理解されず結論をつけるということには、将来に大きな問題を放任する可能性がありますので、しっかり理解をさせていただいて結論に持っていきたいと思っております。

それから、総合学科では、その総合でよかった、職業科との関係ですね。これは、職業科はどうするんだという感情がありまして、そのあたりの関係。それから、多部制・単位制は、現在の松本筑摩高校のような姿を肯定するような姿でございますが、それ等の問題の抽出を行って、現在の定時制の位置をどのような形で脱却するのか、よりよい学校にしていくのにはどうするかという議論を進めていきたいと思います。

それから、職業科、地域校、その他については、在り方を検討しなければならないのでございますが、次代の青年を育成するため、現在の学科に何を取捨選択するかという議論をしていただく必要があるだろうと思います。特に職業科につきましては、一般の委員の皆さん方からもたくさんの意見をちょうだいして、どのように構成するのだということもしっかり議論したいなと考えておりました。

そんな認識で、最終的には、子どもにも、親にも、社会からも望まれる学校というような姿が出来上がればいい。出来上がりの度合いについては、どの学校でも、今よりは進歩した形になれば、それはありがたいなあと考えております。

そんな認識を持っておりますので、よろしくお願いいたします。

まず、「魅力ある」という姿の中で、候補案の中の詳細なご説明を、先に事務局からお願いをいたしたいと思いますが、よろしゅうございますか。

（野村主幹教育支援主事）

候補案の中の・・・。

（池上委員長）

総合学科、多部制・単位制、地域校ですね。こういうところが挙がっておりますので、その内容をお教えてください。

（野村主幹教育支援主事）

はい。

候補案の中で、多部制・単位制、あるいは総合学科、あるいは地域校の扱いということによろしいでしょうか。

候補案では、箕輪工業高校の多部制・単位制への変換ということで書いてございますが、候補案をお持ちでしたら、再編後のイメージのほうの話かなと思うわけでございます。前回も、6月の時もお読みいただきましたが、解説のほうがより詳しく出ておりますので、解説のほうをご覧ください。

8月末の時の会議、前々回の時の「県立高等学校再編整備候補案について」ということでありますが、その2枚目のところに、多部制・単位制の転換ということで、箕輪工業高校を載せてございます。その中で、「再編後のイメージ」ということでございます。2ページ目のところにございますが、よろしいでしょうか。

「箕輪工業高校は、工業科を設置しているが、既設の施設設備を活用した体験的な学習を行うことが可能である。また、地域産業との連携のインターシップ等についても進めていく。こういうことを考えながら、ここは工業科のことについてちょっと説明をしてあるわけでございますが、多部制・単位制ですので、そういう施設設備等の資産を生かしな

がら、これは多部制に限ったことではございませんが、多部制・単位制の中で体験的な教育を行うことを考えていったらいかがかというようにご提案であります。

また、試算のところでは、「午前部、午後部、夜間部という三部制の多部制・単位制とすることにより、全日制と同様な時間帯で学ぶことができ、また重複する部以外の授業を履修することにより、3年間で卒業することも可能である」と。

多部制・単位制ですが、一部の部に属しておりますと、一部の部ですので、定時制という扱いになるかと思いますが、4年かかるわけでございますけれども、例えば、午前部、午後部という設置の中でやっていきますと、3年間で卒業に必要な単位をとれるということで、「3年間で・・・」というように書いてございます。

また、午前部、午後部の場合ですと、全日と同様な時間帯で学ぶことができるということで、仕事を持たない生徒さんならば、こういうところでも学習することができるというふうに考えております。

3番目の、「・」でございますが、多様な生活歴や学習歴のある生徒に対応し、自分の得意科目を深めたり、進路希望により科目選択ができることや、自分に適した時間帯で学べることを生かして、大学進学を目指すこともできる学校としていくと書いてございますが、既に学習歴と言いますか、例えば、全日制の他校を仲介して、この学校に入り直すという生徒も考えてございますし、そういう意味ではさまざまな学習歴ということでございます。

自分の得意科目を深めたり、ということでございますが、単位制でございますので、得意科目を中心に学習することもまたできやすいというふうに考えてございます。自分で、進路希望により科目選択することができやすいということでございます。

また、自分に適した時間帯で学べるということは、多部制であることを利用しましたら、当然午前部、午後部、夜間部の中で選択を移ることもできますし、また午後部、夜間部とわたることも、場合によっては可能であろうというふうに考えてございます。それを生かしていることによって、また大学進学を目指すこともできると考えてございます。

それから、幅広い教養や、職業に関する知識、技術の習得を希望する地域の人に、学ぶことができる機会を提供し、生涯学習の場としても活用できるように工夫していく。これは、講座を聴講するというような形で、一般社会の方に学校を開いていくということでございます。

他の定時制との連携した形のものは何か考えられないかということをうたっておりますし、また第3通学区をカバーしております松本筑摩高校通信制課程のスクーリング会場としても活用できるのではないかとというように、具体的には考えております。

また、多部制・単位制につきまして、後段ご提案しております箕輪工業高校の場合であります。多部制・単位制については、多々ほかのことも考えられるのかなというように思っております。

まず、この1点でよろしいでしょうか。あと・・・。

(池上委員長)

こういう内容ではありますが、現在の定時制からよりよい学校にしていくという姿で、正直、かなり乖離(かいり)をしているのではないかなということで、いったいどういふふうに進めて行かれるのかなあということなので、正直、私も疑問に思っている最中なのでございますが、このあたりについては委員の皆さんのほうでいかがでございますか。

(笠原副委員長)

多部制・単位制のイメージというのは、今の説明でもよく理解できますが、ちょっと3点ほど、県のほうにご質問をしたいと思います。

まず、生徒の多様化に伴って、高校の多様化というようなことで特色学科、コース制というような多様化路線といったものが進んできましたのですが、その特色学科でも、あるいはコース制でも、最近では定員割れをする学校が少なくないように思っているわけです。

総合学科、また、あるいは多部制・単位制高校というのは、生徒の多様化に対する新たな方向をというようにとらえていいと思いますが、実際に中学生の求めている方向とはどんなタイプの学校なのだろうか。以前新聞の記事で、ちょっとそういうようなことが、どんな学校は何パーセントというように出ていた記憶があるのですが、その辺をちょっと、まずお答えいただけますでしょうか。

(柳澤教育主幹)

はい。今、多様化というお話がございましたが、今、97%という、ほとんどの子どもたちが高等学校へ進学をしていくという状況の中では、当然のことながら、さまざまな生徒のニーズ、要望、求めるものというものが多様化しているという現実がございます。

この多部制・単位制につきましては、前にもお話ししましたと思いますが、今現在、松本筑摩高校が、昼間部、夜間部の二部制をとっておりますが、完全なる多部制という形ではございません。この平成12年にスタートした時点で、昼間部が80名募集をいたしました。それを大きく超える応募があったという現実もございます。

この多部制・単位制というシステムを使って、どのような学校をつくっていくかというのは、その地域、あるいはその母体となるある学校とさまざまな状況によって、いろんなことが考えられるだろうと思っております。

もちろん、全日制のいわゆる通常の学校に行き、普通科に行きたい、あるいは工業科に行きたい、商業科に行きたいというさまざまな選択肢。その一方で、なかなか全日制の枠組みの中にはまりきらないといった生徒さんもいらっしゃる。そういう方々へのニーズ。あるいは、ここで提案しておりますが、生涯学習的な観点というものも入れ込んだらどうだろうということで、実は松本筑摩高校も発足当時に、いわゆる生涯学習講座として、土曜講座を何講座か設けたわけですが、当時、例えば「パソコン入門」というような講座には地域の方々がたくさん応募されて、ちょっと1年待ってくれというような状況もあったわけでございます。同じようなことは、長野商業高校も土曜講座というように、地域の方々が学ばれているということがございます。

先ほども人口推計がございましたが、今後、高齢人口が増えていくというような状況もありました。学びたいというニーズも地域にはたくさんあるということから考え

ますと、やはり生涯学習的な観点というものも、ひとつ視野に入れていく必要があるかと思っています。

例えば、前に富山県の志貴野高校の例、それから私どもの考えたイメージということで、資料をお示ししてご説明した経過がございます。静岡中央高校という多部制・単位制の高校がございますが、簡単にご紹介しますと、この静岡中央高校は、平成5年の開校でございます、定時制、それから通信制ということで、毎年定員が160名、通信制1,000名となっておりますが、この学校は2学期制をとっておりますので、春と秋の入学がございますが、平成5年に開校した当時は、春のほうの入学の志願倍率が3.58倍というような倍率になっております。後期のほうは8.50倍というような倍率になっております。ずっと平成5年からスタートして1倍を超えておまして、平成16年の実績を見てみましても、1.23倍、後期が2.75倍というような倍率になっております。

県の状況によっても違いますが、そういう意味では、大変に高いニーズがあるのかなと思っています。なお、この静岡中央高校は、進路実績などをホームページで見ても、進学が、例えば平成16年度卒業生179名中の、国公立大学を含めて大学が41名、短大が12名、専門学校49名。進学が102名。就職のほうも24名。その他53名というようなことで、さまざまな生徒さんが学んでいるという状況がうかがえるかと思います。

また、やはりこの学校でも、通信制のe-Learningの導入もすでに実施をしておりますし、生涯学習講座も、開講しているようです。さらには、この学校は中学校の不登校の生徒さんのための居場所、教室を、ボランティアスタッフに応援を頼みながら設置しているというようなことがございます。これもひとつの独立校としての多部制・単位制のありようかと思います。

こういったことを、東京でも「チャレンジスクール」という名称で、いくつかの学校が新しくスタートをきっております。

そういうようなことで、必ずしも今現在、定時制に通われている生徒さんだけをターゲットということではなくて、もっと幅広く、場合によったら、今、全日制に通われている生徒さんもひとつの選択肢としてできるような、「魅力ある」多部制・単位制ということができればという思いでございます。

(笠原副委員長)

今、ご説明がありましたように、多部制・単位制というと、非常に幅広い生徒が集まるということですね。全日制で学力が追いつかなくて退学してしまったという生徒が、せめて高校の卒業資格だけでも得たいというような希望で編入したり、再入学をしてくると。そういう生徒がいる一方で、大学進学を目指して、受験に必要な科目、あるいは得意科目を中心に学力を伸ばして、自分の進路の実現を図りたいというような生徒。そういう両極の生徒が入学をしてくる可能性があるわけですが、そのほかに、さらに学習歴だとか、あるいは生活歴についても、非常に多様な生徒が入学をしてくる。そういう入学の目的が異なる多様な生徒に対して、本当にそのニーズに応えられるのだろうか。教育課程の編成などの面を考えて、その辺がちょっと我々にもよく見通しがつかないといえますか、そんな感じがするのです。

先ほど説明があったように、松本筑摩高校では、二部制、それで単位制も実施をしてい

るわけですが、その辺のところも含めて、もう一度その辺の見解をお聞きできたらと思っています。

（柳澤教育主幹）

はい。今、笠原委員さんからご指摘のことは、一番大きな課題ではあると思ってはおります。

多部制・単位制になりますと、おそらく通常の、いわゆる「標準法」からいきましても、教員の配置というのは、同じ規模の学校から比べましても、人数的には多くなろうかと思っております。講座数は、単位制ですので、通常の学年制のシステムよりはたくさんの講座が展開されると思います。従って、松本筑摩の例を見ましても、学級募集は1学年40人ですが、講座の人数を見ますと、もっとずっと少ない人数で講座展開がなされているということでございますので、さまざまな工夫をしながらということになろうかと思っております。

学校以外の地域の方のそういった協力も得ながら、それぞれの生徒さんの進路実現がかなうようにというようなことは考えております。

また年齢的にも、おそらく幅広い方も入ってこられるということではありますが、基本は、生徒さんのやる気を、どう引き出していくかということが土台になろうかと思っております。例えば通信制ですと、本当に学びたいという気持ちがないと続かない。自分で自学自習をしていくというシステムが通信制ですので、そういう意味では多部制も似たようなところがあるかと思っておりますが、そういったガイダンスとかカウンセリングの体制もきちんととりながら、きめ細かく、つくっていくということが必要だろうと思っております。

（笠原副委員長）

最後にもう一点ですが、多部制・単位制高校については、以前にお配りいただいた資料の「イメージ」という中にも、「いつでも、誰でも、自分のペースで学べる学校」と書いてあって、それは理解ができるわけですが、「子どもたちの居場所としての役割を果たす」というような特色が強調されているように思います。

先ほど、委員長さんの学校視察の中でもそんな話がちょっと出たわけですが、これは、全日制へ、何らかの原因で通えなくなった生徒、人間関係が全日制でうまくいかなかったりしてドロップアウトをしたような子どもたちの受け皿として、新たな学校を意識している部分もあるのだろうと推測をするわけです。「居場所」というものは、精神的な居場所と、物理的な居場所というのがあって、私の理解では、物理的な居場所というのは、「人とのかわりを持たなくても済む場所」というように理解をするわけです。人の成長というのは、人とのかわりがなくてはあり得ないことだと思います。従って、教育の場としての居場所というのは、物理的な場所より、むしろ精神的な居場所のほうが大切ではないかなと私は思っているわけです。

その精神的な居場所を考えてみた場合に、それは、ありのままの自分を受け入れてくれる教師や生徒とのつながりが実際に自分自身で実感できて、安心していられる場所ということだろうと思っております。

学校では、授業や学校行事、あるいは特別教育活動を通してのかかわりがあるわけですが、全日制で考えた場合、それはホームルームや学習集団の中での活動を通して、教師や

友達といった人とのかかわりがあったり、また、クラブ活動を通しての指導者や仲間とのつながりといったところに、子どもたちは居場所を求めることが考えられます。

最近、生徒会の役員に自ら積極的に参加をして、居場所を求めるという子どもも多くなったと聞いていますが、にもかかわらず、居場所を見いだせずに、学校を去らざるを得なかった生徒たちが非常に多いということだろうと思います。

そういう意味で、多部制・単位制の高校は、クラスもある、クラブ活動もできる、学校行事もあるというふうには言っていますが、特に単位制の場合は、生徒自身の居場所の選択肢、あるいは選択幅、選択範囲といったものが狭くなってしまうような気がするわけです。こういう大切な子どもたちの居場所としての役割を果たすといわれる、この多部制・単位制について、その辺は、もう少し具体的に何かお考えがありますでしょうか。

(柳澤教育主幹)

やはり、この多部制・単位制の高校も、ひとつの高等学校でございますので、基本は、きちんと学力をつけて社会に送り出していく。あるいは、高校の卒業資格を取りたい。純粹に科目だけを学びたい。さまざまなニーズに応えられるわけですが、基本は、中学を卒業した子どもさんたちの年齢層でありますと、きちんと学力をつけて、そして社会に送り出していける、進路を実現してあげるのが基本にあるわけでございます。あまり、単なる居場所という表現がいいかどうかは分かりませんが、そういうことだけのためにということでは決して考えているわけではございません。

また、定時制の再編整備にあたっての基本的な考え方で、最初のころにお示ししました中に、なかなか子どもさんによってはきちんと学校に通えないとか、いろいろな事情で不登校になっているという子どもさんたちもいらっしゃるわけです。一方勤労青少年のための、という定時制のスタートの一番の理念であります部分のニーズにも応えていかなければいけないということもありますので、全部の定時制を多部制・単位制にするということ、候補案で示しているわけではございませんので、それぞれの地域に、必要に応じて定時制は存続をしていくということでお示ししてございます。

さらに、再編によって定時制が統合するということには、基本的な考え方で示してありますように、その空いた教室を、必要に応じて、学びの場、あるいは学習できる、相談できるというような相談室的なものを、学習室的なものを、必要に応じて設置していくというような考え方も示しているわけでございます。

多部制・単位制のほうは、単なる生徒の居場所ということではなく、やはり学習の場であるということを中心に考えてきたということでございます。

(池上委員長)

よろしゅうございますか。

実は、昨晚もそうだったのですが、上農さんに行かせていただいても、赤穂さんも、生徒の、子どもの数は減りますが、トレンドとしては、今の定時制の学校に入る子どもたちは、率では増加するのだろうと。これは、しかし積極的な今のような話のようなアクションがない状況でも、そういう方向にあるというふうに私は理解をしていたのです。その辺りを打破するためにも、この多部制・単位制というものを創設してやっていこうという認

識と考えてよろしいのですかね。

先般の、小林委員、そういうふうに記憶をしておりますが、いわゆる交通の問題です。多部制・単位制は、本当にいい学校になるのだろうかというための条件というものが提示されていると思うのですが、ああいう方向で、本当行く場合にそのことが成就できるような状況になるのかどうかということを、私自身は大変危惧しているのです。そういうことはいかがでございますか。つくったところが、うまくいかなかったというところがあると、これは、いくら我々が素人でもミスチョイスでありますので、そのところをしっかりと努力していただきませんか。

（熊谷委員）

私は、そういう意味では素人なものですから、今までの定時制のイメージというのは、どこにしても全日制と、当然両方ある学校というイメージですね。

例えば下伊那でいきますと、飯田工業にしても、飯田長姫にしても、全日制もあるし、定時制もあるという学校だということですが、多部制・単位制というのは、案で言えば、定時制単独の学校になるというふうに考えられると思っているのですが、非常に大きく変わるわけです。50 年間、言ってみれば、全日制に併設された定時制というイメージから、定時制単独校になるということだろうと思いますので、そのプラスマイナスは結構あるのではないかという気がするのです。そういう部分も、ひとつ聞かせてもらいたいなという気がするのです。

今までの私どもの常識からいうと、全日制のあるところへ、定時制もありますよという学校だったものが、定時制単独の学校ができるわけですから、まったく新しい学校が誕生するというイメージになるかと思うので、そのプラスマイナスというのは、どこになるのかなという感じがするのです。

正直に言って全然、イメージとしてわからないのです。その辺のプラスマイナスというのは、当然あると思うので、その辺について、今日でなくて結構でございますが、ちょっと教えてほしいなという気がするのですが。

（柳澤教育主幹）

候補案でお示ししておりますのは、多部制・単位制の独立校ということでございますから、今、熊谷委員さんからお話がありましたように、全日制と併設ということではなくて、多部制・単位制の独立校ということでご提案申し上げているということでございます。

平成 15 年 6 月に、この多部制・単位制の検討委員会のほうから『報告書』をいただいております。その中でも、今後二ーズの高い学校であるので、その中でもさまざまなアイデアが出ておりましたが、つくっていきましょうという提言をいただいております。それを受けまして、この改革プランの検討委員会が受け継ぎまして今日に至っているということでございます。

従って、多部制・単位制を望む声というのは、かなり前からあったわけでございますが、この改革プランの検討に委ねられているということになっているわけでありです。

今、メリット、デメリットというようなお話がございましたが、いわゆる夜間の定時制の場合ですと、これは基本は夜間の学習ですから、3 年間では当然卒業の単位がとれませ

なので、基本は4年間で、4年以上の在籍で必要単位の修得をして卒業というのが夜間の定時制でございます。

また、全日制との併置でございますので、施設の活用の面ではさまざまな制約があるということも事実でございます。例えば、体育館の使用、あるいはグラウンドとか。全日制のクラブ活動と競合するということもございます。さまざまな点で、やはり独立校であるほうが、より柔軟にいろいろな活動ができるということがございます。

松本筑摩高校の発足は、実は定時制・通信制の独立校として設立されたわけでございますが、生徒の急増期というようなこともありまして、校舎を建て増して、全日制をあとから設置してきたという経過もございます。

今、考えておりますのは、ひとつの独立した学校の中で、多部制・単位制のシステムを活用して、より「魅力のある学校」をつくっていききたいとでございます。

（熊谷委員）

要するに、現在の、今言いました筑摩高校も全日制と定時制がありますよね。現在の、その両方ある場面と、単独校にした場合の、プラスマイナスを分かりやすく、今言ったように、クラブ活動が制約されとか、ならないとか、そういうものを分かりやすく説明してほしいのです。

県民にとってみると、ある意味で言うと、今までの高校の在り方と大きく変わるわけです。全日制、定時制というのは、「一緒の学校にありますよ」というイメージだったのが、「定時制単独校ができますよ」と大きく変わるわけですから、そのプラスマイナスはどうなんですかということを説明できるようにしてほしいのです。

私が言っていることが分かりますかね。県民にとって分からないわけですね。今まで、わたしらにしてみれば、定時制と全日制というのは、同じ学校にありますよというのは常識だったわけです。それが、今度は定時制単独校ができますよと。その場合には、「プラスマイナスこうですよ」ということが、今の説明にしても、はっきり分からないのです。今言ったように、はっきりすればいいのです。「併用しているとクラブ活動に制限がありますが、単独校にすればクラブ活動も自由にできるから、教育にとってプラスですよ」と、そういうことをはっきり明記してもらえば、そうか、それならぜひ下伊那に多部制高校を誘致したいというのが起きるかもしれませんし、箕輪ではなくて。そういう分かりやすい話をしたのです。

もっと言うと、箕輪を多部制にするという県教委は言いましたが、「そういう方向なら、ぜひ下伊那に持ってきてよ」という議論をわたしらはしたいのです。だから、そのためにも、定時制単独高校にすると、こういういいことがありますよとはっきり言ってほしいのです。そういうことです。

（篠原教育幹）

おっしゃることはよく分かりました。

私たちが、「学校」というものを考える場合、全日制でも、定時制でも、それから通信制でもそうなのですが、我々が「外から見てこの学校がどうか」ではなくて、「学ぶ生徒たちがどうか」というところが一番のポイントだと思います。そういう観点から言います

と、現在の定時制と、多部制・単位制の中の、例えば夜間の部、一部、二部、三部で言えば三部ですね、これはまったく変わりません。つまり学ぶ生徒からすれば、どうしても夜間のこの部分で学ばなければいけない事情が、生活の面か、あるいは気持ちの面か、あると思います。そこで学んでいると。同じように、多部制・単位制になっても、そういう必要があればそこで学ぶということになります。

もう一つは、現在は多部制がございませんので、一部、二部がないわけです。ただ、今、定時制の夜間で学んでいる生徒の中には、できれば二部、つまり午後部ぐらいのところで学びたいと思う生徒もいるかもしれません。そうすると、そういう生徒はそこで学べるということになります。

つまり、私たちは外から見て、学校というものがこういうスタイルであるとしても見がちだと思います。ただ、学んでいる主体は生徒なのです。その生徒たちから見ると、やはり一番いい部分は、これは定時制でも同じ。全日制でも、いろいろな全日制がございます。一番いい部分で学ぶというのが、その生徒にとっては一番幸せなことであるというのは、これは自明だと思います。

そういう意味で言いますと、今までの定時制と、多部制・単位制が、どこが違うのか。プラスマイナスはあるか。これは生徒たちの身になって考えていきますと、生徒たちにとってはある意味では多様な選択だという意味で、私はプラスであると考えます。つまり、我々大人にとってどうかという観点は、あまり必要ではない。そのように思います。

以上でございます。

(熊谷委員)

そういうことは分かるので、分かりやすいように、ペーパーなりで、「単独校にした場合にはこういうプラスがありますよと。今までこういうことがありましたよ」ということをはっきりさせてほしいのです。

事務局の皆さんの言い方は非常に理屈っぽくすぎるのです。

(小林委員)

いつも思うのですが、この議論は、すぐ我々と県ではなくて、我々自身が本当に単位制・多部制をどうしていけばいいかという中で、必要なことを事務局にお聞きするという形にしていくべきではないかと思います。

それで、多部制・単位制の事例が、先ほど静岡中央、この前は富山も出ました。それが成功しているかどうかは分からないにしても、この地域は2つとも、通学の範囲が人口でいうと100万人以上です。この事例を、単純に長野県へは当てはめられない。たとえ箕輪以外のところへ持っていったとしてもです。従って、それはそれとして参考にするとしても、あくまでも第3通学区独自の考え方でいかなければいけないということがまず、これが条件だと思います。

私は、この多部制・単位制を設置するときに、どうしても必要なことは2つあると思うのです。1つは、先ほど県でも言っているように、生涯学習の場をなんとかして持ち続けたいということ、これは私も大賛成であります。となると、地域が積極的に受け入れる学校でないと、絶対に失敗する。一方的に、とにかくずっと説得して、最終的には、まあ

我慢してくれというようなやり方では成功しない。これはもう、間違いないところだと思います。

2 つ目は、先ほど熊谷委員もおっしゃっているように、やはりプラスマイナスということについて、地域のイメージがどうかということをしちゃんと理解する必要があると思うのです。そうしたときに、一つは、どうしても多部制・単位制というのは不登校の受け皿というイメージが現実にはあると思うのです。もう一つ、これは高校の先生とよく接して、または中学の先生たちと接していて感じることなのですが、やはり多部制・単位制にしても、定時制にしても、通信制にしても、ひとつの傾向があるということを感じるのです。それはマイナス面の傾向かなということです。どういうことかと言いますと、特に中退した人たちが、私立の通信制なりへ行くと、今とても増えていますよね、結局今の雰囲気の中で、全日制で勉強していくのは窮屈だ、1 日勉強するのは嫌だと。好きなときに行ける学校がいい。そういう、ある意味では、楽な方向という雰囲気がかなりあることは事実だと思うのです。そういうマイナスイメージではなくて、プラスイメージにしていくには、この多部制・単位制をどのようにしていくのがいいのかというのが、一番議論しなければいけないことだったなと思うのです。

現実には、さっき言ったように、不登校の子たちの受け皿はどうしても必要ですから、どこへ持っていくにしても、多部制・単位制は、こういう不登校の子たちの受け皿という部分は、現在の定時制をある程度そのまま移したとしても、これはどうしても必要かなと。

けれど、これだけでは、地域が喜んで受け入れるかどうかは、非常に難しいのではないかな。つまり、この学校を、うちのを多部制にしたら、前よりも生徒が集まるようになったと。それがないと、絶対に受け入れができないと思うのです。

そうした時に、私の資料にあったので。いいですか。

今度出したナンバー3 というもののところですよ。2 枚目の 3 番の(4)。これは、あくまで私の考えです。こういう条件が必要かなということですよ。

現状では、これを箕工へ持っていこうがどこへ持っていこうが、定時制は全廃しないという条件がありますから、どこへ持っていこうが、今のやり方でやるとどうしても今までの箕工の定時制を希望していた子、それから上農の定時制を希望している子が、全員集まっても、たかだか1 学級、20 人になるかならないかということです。

そうすると、県教委の目指している、できるだけ規模を大きくしていくということへまるっきり逆行することになるんです。だから、こういう子どもたちの受け皿というのは絶対必要ですが、これ一本やりではなくて、それにプラスしたものがどうしても必要かなと。それについて、ここで我々が一生懸命に議論する必要があるのではないかなと思うのですね。

私の案としては、これは県でも言っているようで私も賛成ですので、いいですけども
....

(池上委員長)

小林委員、すみません。ちょっと待ってください。この資料は、事務局いいんですかね。みんなのお手元に、もうあるわけですか。

(野村主幹教育支援主事)

すみません。委員さん限りということで事務局に渡されまして、今回お配りしてございます。

(池上委員長)

今回でしたか。すみませんでした。

(小林委員)

ちょっとどうなっているかよく分かりませんが、すみません。

そういうことですので、どうしても学科を併設した形でやったほうがいいということが1つ。

それから2つ目は、これが県の考え方と私は同じなのですが、現実は無学年制というのはいい面もあるかもしれないですが、実際問題として、先生の生徒指導が非常に難しいのではないかと、学年の違う子がいっぱい集まっていると。部活とは違うわけですから。できるだけ同学年制にしていくために、そういう意味では、3修制を基にして単位制にしていくということがいいかなというのが2つ目です。

それから、一番私が強調したいのは、「ウ」です。結局、単なる学力が低い、不登校で勉強をしてこなかった、それで、従来のような形で、少人数で本当に力をつけていこう。これは今までの定時制の延長というか、これは、私も定時制を幾つか見させていただきましたが、本当に不登校の子が復帰しているんですね。だから、これは絶対必要だなということ。

ただ、それだけでは「魅力ある学校」にならないので、今の子どもたちは、教室の中の授業もいいのですが、もっと体験的な、実習的な授業をとっても望んでいるのです。ですから、単なる午前の部「はい、午前の部だけやって終わり」、ではなくて、もっと現場へ行って学ぶという機会をつくってやって、ある程度カリキュラム化くらいはしてもいいかなと思うのです。例えば、午前はある程度学校の中で勉強したから、午後は、「農業のほうへ進みたいので、実際の農場へ行ってこういう学習をしたい」、または、「企業へ行って、自分はこういう方面に行きたいからこういう勉強をしたい」、または、「僕はスポーツでしっかり力をつけたい、だから午前は勉強する。午後はサッカーならサッカーの指導に、非常に力のある人のところに付いて、ひとつの学習という形でやりたい」。そういうある程度のプログラムを持ってくると、今までの定時制というイメージではなくて、もうちょっと集まってくる子が出てくるのではないかとということです。

これが可能かどうかは、またぜひ検討してもらいたいのですが。とにかく、「魅力ある学校」、つまり簡単に言うと、今よりももっと周りの学校の生徒が少しでも集まってくるという多部制・単位制にするには、どうすればいいかということです。

これは、まったく県独自、ここの第3通学区独自で考えることですので、そういう議論をぜひしてほしい。すぐ、県に聞くのではなくて、聞きたいことは大いに聞いてもいいのですが、ぜひ我々で、不十分であっても、そういうことを、案を出して、それで、「いや、この案ではこういう点が問題だよ」というのは、県に指摘してもらえばいいかなというふうをお願いしてと思っています。

以上です。

（池上委員長）

はい、ありがとうございました。

やや、今の話で、私もいろいろ資料を調べてみましたが、実際はなかなか多部制・単位制というところが先達のところがよく見えなかったということもありまして、どうしても、県がブレーンということに話が集中するくらいがどうしてもあった部分で、私はこう考えます。いわば、前置き議論でやっているのは結構なことだと思いますのでそういう方向にやらせていただいて、補助的に県の説明を拝聴するということにしたいと思います。

熊谷さん、そういうことでよろしゅうございますか。今のところ。今のお説はよくわかりました。

（熊谷委員）

またくどいようですが、小林さんの今の資料に「ア」のところに、「新たに併設」と書いてありましたね。結局、この議論だと思うのですよ。要するに、多部制・単位制は必要だろうというように、それを従来の常識として併設校にしていくなのか、単独校にしていくなという議論があってもいいのではないかなという気がするので、プラスマイナスを私にはよく分からないので、ぜひ考え方を示してほしいなということです。

（池上委員長）

私もそう思います、小林委員なんかはもうほとんど資料を使っていった議論のところに来ているのです。それはよくご自身で判断してもらって。それは確かに違います。

（熊谷委員）

県民の常識からすれば、今までは全部併設ですよ。それを単独校にしていこうって新しい発想が出てきたわけですから、それはプラスマイナスで、当然、もう少し分かりやすい言葉で、単独校にすればこういうことがありますよと、併設校ではこういう弊害がありましたよと、それは教員の配置にしても、「昼は全日制の教員が威張っていて、定時制は肩身が狭かった」とか、そういうのはさすがにないと思いますが、もう少し分かりやすく言ってほしいですね。

（柳澤教育主幹）

今までは夜間定時制だけであり多部制・単位制というのは併設がなかったわけです。これが午前部、午後部と、昼間からの活動になりますので、そうしますと現在の全日制がやっているところにそういう形でつくりますと、とても、今のどこの全日制をとりましても、施設的には競合していくことになり、無理だろうというふうに思っております。新しく施設の中に独立校舎を造っていくというようなことになると、またちょっと様子は違いますが、今の施設設備の中で全日制と、この多部制・単位制を一緒にするということは、大変混乱を招くことになり、なかなか運営が難しいだろうというのが一つございます。

それからもう一つは、夜間の定時制ですと、先ほど言いましたように4年間ですが、今、

夜間に通っている生徒さんの中にも、必ずしも夜間でなければ通えない、あるいは夜間に通わなければならないという生徒さんばかりでもないだろうと思っております。やはり 3 年で卒業したいという生徒さんも、当然いらっしゃるだろうと思しますので、そのようなニーズに応えるためには、やはり午前部から授業を展開していくという中で、そういう点では大変メリットがあるかと思っております。

（熊谷委員）

それは言っていることは分かるので、この『報告書』の 20 ページにも、単位制・多部制の生かし方うんぬんを書いてあるのですが、これは正直いって私が読んでも意味が分からないのです。これは、今おっしゃるとおりなんです。こういうことから、ぜひ単独校で設置したほうがいいですよということを、もう少し県民に分かりやすいように書いてほしいということを私は言っているのです。ちょうどこの 20 ページを読んでも、何を言いたいのか正直言って分かりません。

「単独校にすればこういういいところがありますよ」と、はっきり県民に分かるようにして言ってほしいのです。

（小林委員）

私の案については、もう少し付け加えることがあるのですが。

今県のほうから、とても無理だと簡単に言われてしまったのですが、検討はするべきだと思うのです。最初から、もう無理だなというのは議論にならないのではないかと。例えば併設の既設のものも、そのままというのではなくて学級減でということも考えられますし、それは今後どこまで可能かということを検討はする必要があるということをお願いしたい。

それから、「既学科併設」というのは 2 つ意味がありまして、「ずうっと」ということも考えられますし、いわゆる「段階的に」、状況を見て、本当に多部制・単位制へもう本当にみんなが集まってきたとなれば、特に今ある既存のものを併設する必要ないという状況になるのだったら、いくらでも変えてもいいかなと。そういう流動的な立場で「併設」と申し上げたのです。

もう一つ、これはおそらく県でも即座に駄目だと言うかもしれませんが、子どもたちが「魅力」ということを考えたときに、もしその併設の学校が、仮に箕輪工業があったときに、多部制・単位制が一方であって、今までどおり普通科があって工業科がありますよね。そうすると、「僕は今、多部制・単位制にいたんだけど、普通科の、いや工業科についても単位をとりたい」それが可能だとしたときに、ちょっと今までとは違うかなと。これはちょっと難しいかもしれませんが、場合によっては、転学もできる。結局、今の子どもたちが一番厳しいのは、特に職業科などそうですが、いったん入ってしまえば、途中で進路変更が難しいですよ。だから、それがもし可能だとすると、かなり子どもたちには魅力が出てくるかなということも、ちょっと付け加えさせていただきたいと思います。

実際に可能かどうかということになると、またそれは検討が必要だと思うのです。

(藤本委員)

前回プリントをお配りしましたが、もしプリントがなければ余分にお持ちしました。「定時制と多部制単位制高校について」というプリントを、前回の委員会にご提出しました、小林委員さん、それから熊谷委員さんとかかなりかち合いますのでちょっとご提案します。

まず 1 番は、結論的なことが枠内に書いてあります。非常に言葉がよくないのですが「夜間定時制の半分を占める教育弱者」、「不登校生の教育権を奪ってはならない。そのためには、定時制はやはり残さざるを得ない。広くて、長く、交通の便が非常に極化している第 3 通学区においては、どこに多部制・単位制の独立高校を置いても、そこに生徒が集まるか、いま一步不安である」。3 番目、「多部制・単位制高校には若干問題点はあるが、存在意義をまったく否定するものではないので、地域から要求があった場合は、とりあえず既存の定時制に午後部として設置して、様子を見たらどうか」と。たぶん、小林委員さんのご提案と重なる部分もあるかと思います。

それで、1 番として、定時制と多部制単位制では、役割が違うということを分かりやすく私なりに表にまとめてみました。教育制度や、社会のひずみや、家庭崩壊、いろいろなことで生徒が多様化したり、学校から、教育から逃げている。そのようないろいろな状況があるわけですが、定時制の子どもたちはどうかというと、言葉がよくないというご指摘を受けましたが、やはり教育的には条件の恵まれていない不登校生が中心で、単位制の制度には対応できない生徒たちである。

では、多部制の生徒たちはどうかというと、これはどちらかといえば全日制、現代の学校制度のひずみといったらいいのでしょうか、そんな生徒が中心になるのではないかなと思います。もちろん生涯学習などの生徒もおりますが、だから、全国的には若干不登校生の割合が少なくなっているわけです。横浜総合高校では 10% です。

あとでデータを出しますが、長野県の定時制の場合は、不登校生が全体の 50% から 60% を占めているわけです。さらに、その不登校生の 74% が 100 日以上欠席者です。これは、2001 年度の生徒で、後で出てきます。100 日ということは、重度の不登校経験者で、年間の半分を欠席されているという方です。こういう方にとっては、今の夜間定時制、すなわち近くの距離で、家庭的な雰囲気、少人数でゆっくりとした授業、しかも一つの教室で、非常に細やかに、そして教師と友人関係、信頼関係でゆっくりと自信を回復して行く、そういう授業が欠かせないだろうと思います。

一方の多部制というのは、やはり異年齢の生徒が混在するホームルームになって、単位制ですので、やはり若干系統的な学習というのが困難になる。そうはいても、単位制としての魅力はやはりあるわけですが、安易に希望したり、安易に中退する生徒の問題もあるわけです。ですので、他県によっては、実質的に学年制を若干取り入れている多部制・単位制も、現にあるわけです。

分類すると、下にあるように、不登校、ひきこもり生徒、いじめ、コミュニケーションが苦手な子ども、帰国子女とか、そういう生徒が定時制の子どもたちであって、多部制の中心になるのは、現在の全日制のひずみを受けた中退の生徒とか、適格主義の入試で落とされてしまっ行き場のなくなった方とか、それから生涯学習、チャレンジを望む社会人かなと思います。

2 ページにいけますと、現在のこの通学区の定時制の在籍生徒数を表に載せました。合計値で、1997 年、平成 9 年度に底をついた後、増加傾向にあります。全県的には、1995 年に底をついて増加傾向にある。第 3 通学区の全日制の生徒に占める定時制の割合は徐々に増加傾向にあります。

最新のデータを持ってくればよかったのですが、これは全県のデータです、2001 年度には 384 名定時制に生徒が入学しましたが、その 58%が不登校生でした。さらに、不登校生の 74%が、年間 100 日以上重度不登校経験者。すなわち全体の 43%です。ですので、こういう子どもたちには単位制という制度では対応できない。やはり学年制で、少人数が必要ではないかと。こういう子どもたちの学習権を、ぜひ保障してあげたいと思います。

3 番目は、ぜひ、教育弱者という言葉はあまりよくないと言われましたが、そういう子どもたちから、中等教育の学習権をぜひ奪わないでほしい。そこに『憲法』、『子どもの権利条約』等いろいろ書きましたが、『国連子どもの権利委員会』から、日本政府は、ぜひ定時制は残すようにという勧告を受けております。

3 ページへいきまして、弁護士会からもそういう声明が出ております。

定時制も若干問題点があることは事実でして、定時制の問題点は、やはり退学者が多いということ。いったん退学してしまうと、別の定時制になかなか行ってくれない。それから、定時制自身も適格主義というのがあるということ。それから、私も 2 年前にはずっと定時制にいたのですが、生徒には 3 種類の生徒がいて、不登校生と、中退した生徒と、それから不合格になってきた生徒。これが混在する教室というのは、なかなか大変である。多部制・単位制も、やはりそれなりの意義があると思います。そこに書いてあります。全日制、定時制で退学してしまった子どもが、なかなか再び定時制に来ることができない。地域の生涯学習、チャレンジ学習といろいろあります。それから、集団での人間関係がうとうとういいという子どももおります。それから適格主義入試で行き場を失ってしまったという子どももおります。

ですから、多部制の問題点、先ほど小林委員さんも話された無学年制、単位制の問題点というのはありまして、そこにいろいろ書いておきました、見ていただければと思います。

最後に、生徒指導の困難さで、小林委員さんも言われましたが、横浜総合高校では、担任はすべて携帯電話が離せないそうです。

4 ページにいまして、学習指導の困難さというのも、やはり単位制で、学年制でないので、簡単に、やめるとか、来年単位をとればいいと、出欠要件を満たせばもう教室に入らなくてもいいとか、やはりかなり学習指導、生活指導が必要かなと思います。

多部制・単位制の設置は、多様化した生徒、小規模でコストがかかる定時制を再編し、大きな集団で効率を上げるとか、就職している生徒が少ないというのが理由になっているが、やはり基本は生徒の学習権とアクセス権ですので、それを保証するためには、すべて多部制にすることは困難かなと。仮に箕輪工業高校で、県教委が時間表を出してきましたので、私も時間表を出しましたが、やはり 1 部の授業は、近隣の生徒しか通えない。従って、とりあえずは 2 部を併置したらどうでしょうか。

最後ですが、当面は、定時制をまず残して、既存の定時制に 2 部、午後部だけ併置していく。しかも、単位制はなかなか問題点があるので、一部学年制のよさを加味しないとい

けないと考えます。

最後に、第 10 回の検討委員会の議事録をチェックしましたが、葉養委員長さんはこういうことを言っております。「今後どういう影響が出てくるかきちんと把握して検討する」。さらに「多部制・単位制高校の様子を見ながら定時制の存続を」と。さらに長野県にふさわしい多部制・単位制高校検討委員会の報告も全部読みましたが、その中に、「交通事情に配慮して、2 部制とすることも考えられる」と、明記しているので、私は、先ほど小林委員さん、それからいろんな委員さんが言われたように、生徒の対応と内容が違うということで、ぜひ既存の定時制は残す。しかし地域から要求があったら、多部制もいい点もあるから、単位制の問題点を克服しながら、取りあえずは午後部にして様子を見て併置したらどうでしょうか。

（池上委員長）

具体的なご提案ですね。

先ほどの小林委員のご提言と、今の藤本委員のご提言と。そのほかに、特にご提言がなければ、委員の考え方として、この資料をたたき台にものを考えていきたいと思いますが、そういう進め方でよろしゅうございますか。ほかに、これはまずいということがあるとすれば、お出しただけだと思います。

よろしゅうございますか。

（小林委員）

難しいことですが、今後の課題と考えて下さい。今ここで結論は絶対に出ないものですから。どういうことかと言ったら、現在定時制は、不登校の子が圧倒的に多い。これは事実です。現実には、私は中学現場にいましたので、つくづく感じるのは、問題行動を起こしている子は、正直言いまして、今はほとんど入れません。この子たちの、さっき笠原さんの言った居場所は、結局私立の信州義塾（フリースクール）や通信制とかになります。これで、どうして受け入れないかというのは、私も重々分かります。高校で、たった一人の大変な子を受け入れただけで、ものすごく先生のエネルギーというのは大変だということはあるのですが、現実にはそういう子どもたちの行き場がないことも事実なのです。これを今後どうしていくかということは、とても難しいの問題なので、結論はすぐになんか出っこないのですが、ちょっと、頭の片隅に置いておいていただきたいなと思います。以上です。

（池上委員長）

今、小林委員、それは高校で、どのくらい中学から入ってきて、どのくらい、そのようなところを利用する人がいるのですか。

（小林委員）

それはなんとも言えませんが、人数としては少ないと思います。例えば、私が前にいた学校はかなり大きい学校だったのですが、それでもおそらく、成績ではなくて、そっちのほうで落とされたなという子は、1 人、2 人。場合によれば 2、3 人。確かに数は少ないの

ですが、第3通学区全体にすれば結構いるのではないかなと思います。その居場所とか進路については、どの中学も本当に頭を痛めているのです。たまたま、建設業でそういうものに理解がある人が採ってくれたとか、本当に綱渡りするような形で、結局不登校だけの子については、今も受け入れ先があるのですが、そういう子については、本当に高校ももう受け入れ難い状況があって、これも分かるんですよね。分かるけれども、まったく彼らが「再生する場がない」という現実もある。

今後、こういう子たちもどうしていくかということも、ちょっと考えなくてはならないのではないかなという意味であります。

（池上委員長）

おおむね、その子どもたちは、今、委員がおっしゃるように、社会に出るのですか、それとも私学へに行くのですか。

（小林委員）

私が知っている限りでは、もう公立はほとんど受け入れてくれませんから、私立のフリースクール等へいくのかこのごろできていますよね。

（池上委員長）

そうですね。はい。

（小林委員）

そこへ行くか、いわゆる有職少年になるか、まったくのニートというか、職を持たずにぶらぶらしているかと、いろいろあると思います。

（池上委員長）

ありがとうございました。

今日は多部制・単位制で過半の時間が費やされていいと私は思っているのですが、ちょうど時間が中間あたりに入ってまいりましたので、ここでちょっと休憩を、とりたいと思います。

【休憩後再開】

（池上委員長）

それでは再開をいたしたいと思います。

『最終報告書』に先ほど触れておられましたが、この20ページをお願いします。「(4) 多部制・単位制高校と定時制、通信制の生かし方」というくだりがございますが、その上から3行目ぐらいのところで、「平成15年6月に提出された報告書『長野県にふさわしい多部制・単位制高校について』においては検討されなかった定時制課程の適正配置の課題にも応えるものである」というふうに言っておりますので、ぜひ県のほうから、この内容について、次回で結構でございますので、またご提出をいただければありがたいことです。

いかがでございますか。

（野村主幹教育支援主事）

はい、ご用意させていただきたいと思います。

（池上委員長）

よろしくお願いいたします。

それでは、また継続して議論に入ります。お2人の委員から、それぞれ、多少切り口が違ったとしても、方向を示していただいたり、また、具体的なご提案をいただいておりますが、ほかの皆さま方のほうから、もちろんご質問もございますし、ご意見がございましたら、まずお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。

（川島委員）

ほんとに、初歩的な質問で申し訳ございませんが、やはり多部制・単位制のイメージがわからない点がありますので、お願いしたいと思います。

まず、例えばの話として、午前部、午後部、夜間部と3つの部としてつくった場合、やはり募集定員はそれぞれの部で設けて、もちろん定員オーバーすれば、入試でもっての選抜ということもあり得ると思うのですが、そういう理解でよろしいのでしょうか。

それともう一点、関連しますが、例えば、午前部の子どもが午後部も履修して、3年で卒業できるのだという説明をされるのですが、例えば午後部の生徒がたくさんいれば、やはり午後部の生徒の希望を優先して履修させると思うのです。そうすると、空きが生まれたところだけ、午前部の子どもも選べるというイメージなのか、それとも本当に、午前部には在籍するが、自由に午後部の履修ができるというスタンスなのか。

それと同じように、関連して、以前いただいた富山県の志貴野高校の資料等を拝見すると、これは学校要覧だということなのですが、その4ページに、「通信制を併修することにより、3年間で卒業することが可能なカリキュラムになっています」という表現があって、通信制がなければ原則4年間なんだというような表現なのですが。例えばの話、イメージとして、多部制・単位制に入学した子が、3年間で卒業する割合と4年かけて卒業する割合というのは、どんなふうなイメージで、県教委のほうではとらえていらっしゃるのか。その点をお伺いしたいのです。

（柳澤教育主幹）

募集のことにつきましては、これはいろいろな考え方はあろうかと思います。例えば、午前、午後、夜間でまとめて全体の枠で募集するということも考えられると思います。あるいは、それぞれの部に分けてと、例えば午前、午後部、そして夜間部というような形で募集も考えられるだろうと思います。

今、松本筑摩高校の場合ですと、昼間の部と、夜間の部と、それぞれ別々の定員によっての募集になっておりますが、三部制をつくった場合には三部まとめて募集し、その中で、生徒の希望に応じて、その所属等を決めていくというようなやり方も一つの方法としては考えられるだろうと思います。それは、今後の課題といえますが、どこへどう持っていく

かという具体的な策定作業に入っの段階で検討していける場を、と思っております。

また、最初におそらく受講登録といまして、今年、前期なら前期のどの科目を自分は選択をして時間割を組むかというのを、一人一人ガイダンスをしながら、本人の将来的な、何年間で卒業したいとか、あるいは将来どういう方向に進みたいとかいったガイダンスをしながら、生徒一人一人の時間割というものを策定をして、年度当初に受講登録をする。こういうことが、おそらく基本になっていくだろうと思いますので、その受講登録の状況を見ながら、開講講座というものも設定できるだろうと思っています。ですから午後部のほうの希望が多ければ、それに応じた講座をセッティングしていくというようなことは可能かと思います。

2 学期制をとりますと、先ほどお話しましたが、9 月卒業、あるいは 9 月入学というようなことも対応できるはないかと考えています。今、長野商業の場合ですと、9 月入学はやっておりませんが、9 月卒業というのは出てきております。2 期制をとっているということになりますと、そういうメリットも出てくるだろうと思います。

それから、通信との併修ですが、志貴野高校の場合ですと、通信との併修によって三修制度というのを導入しているようでございますが、今私どもが考えているこのイメージの中では、通信との併修をしなくても、通常の三部制をとる場合に、どこからスタートするかというの、その地域によって違いますが、例えば 8 時半スタートなのか、10 時スタートなのか、それはその地域によって違いますが、午前から午後というふうにとると、通信と併修しなくても、十分 3 年間で卒業することが可能であるということでもあります。

あるいは、例えば、1 年間ほかの高等学校に行って、2 年目でつまずいて中退をしたと。しばらく働いていたけれども、またやり直したいというような生徒さんの場合ですと、いわゆる編入学ということで、他の学校で取得した単位をそのまま生かして、その上に積み上げて卒業に必要な単位を修得するということでございますので、他の学校に 1 年在籍をしたというような単位を持っている生徒さんが編入学してきた場合には、2 年間その多部制・単位制で学習すれば卒業単位が十分とれるというような入学生もございます。

通信との併修ですが、通信の場合は自学自習になるわけですが、例えば多部制・単位制に所属をしながら、一部の科目については通信制でとる。その単位も卒業単位に組み入れていくということも可能でございますし、また逆に、通信制に所属をしている生徒さんも、一部の科目については、その多部制・単位制の開講されている講座、この講座は自分で授業に出て単位をとりたいというような場合は、そのような場合はその単位をとって、通信制でとった単位と合わせて卒業単位に必要なものをそろえていくこと。あるいは、今現在では、大検、今は「高等学校卒業程度認定試験」と名称が変わりましたが、これも年に 2 回開催されるようになりましたけれども、卒業程度認定試験の、ある科目をそれとったということになりますと、その単位の換算もありますので、そういうものも含めて一部科目を修得して卒業単位をそろえていく。いろいろな制度を活用しての可能性というものが出てくるかと思えます。

前に、第 5 回の時だったでしょうか、資料でお示しました松本筑摩高校の通信制に、例えば、諏訪の地区からですと、平成 16 年度で通信制に 503 名が在籍をしています。伊那の地域からですと 262 名が松本筑摩の通信制に所属しております。それから、飯田の

ほうでは 298 名と。こういうたくさんの通信制で学ぼうと志して、松本筑摩に登録をしている方がいらっしゃるわけです。そういった通信制は、スクーリングに、松本筑摩まで飯田から通うというのはかなり大変であるわけですが、そういったことの利便性を図って、松本筑摩高校の場合ですと、例えば飯田に行って学習会ですとか、伊那に行って出張の学習会とかという工夫はしているわけでありましたが、こういった南信地区の多部制・単位制を設立した場合には、そういった通信制の生徒さんの利便性、そしてまた定・通併修、通・定併修の制度も活用できるというようなことも考えられるのではないかと思います。

(関 委員)

2 点お願いいたします。

今、募集のことが出ましたが、もしこの箕輪工業高校が多部制・単位制に転換した場合に、その時の入学希望者数というのがどの程度あると予測しているか、予測で結構ですが、お願いしたいと思います。

それからもう一つ、通学のエリアのことですが、岡谷地区あるいは諏訪地区辺りからは、もし松本筑摩が多部制・単位制になれば、通学可能かと思いますが、その辺の通学エリアのすみ分けをどのように考えておられるか。

この 2 点。もしデータがなければ、次回でも結構ですが、お願いいたします。

(池上委員長)

では、お願いいたします。

(柳澤教育主幹)

募集につきましては、今、明確なことは申し上げられない部分もありますが、おそらく午前、午後、夜間、1 クラス、1 クラス、1 クラスで、120 名程度の募集ということは想定できるだろうと思います。従って、単純にそれを 4 倍にするわけにもいきませんが、学校規模としては 400 名程度ということが推定できるかと思います。さらにまた、通信制との絡みというのをどのように持っていくかというのも、ちょっと課題であろうと思っております。

それから通学のエリアにつきましては、それは候補案では箕輪工業高校でございますので、候補案の詳細な説明の中に書いてございますような範囲を想定しておりますが、伊那、それから飯田の地区の通える範囲ということで、明確にどこの地区からというのはなかなか難しいですが、またこの推進委員会の検討の中で、どこに配置するかということによっても違いますが、箕輪工業高校ですと、候補案の中では富士見から 63 分、伊那大島から 41 分というようなことで、一応こんな感じではであろうと思います。

(池上委員長)

今の松本との関係は、どういうご見解でございますか。

(柳澤教育主幹)

松本地区は、大北地区、それから木曽地区からもたくさん来ておりますので、松塩地区、その辺のエリアを考えてということでございます。

(池上委員長)

わかりました。

ほかにいかがですか。

(熊谷委員)

単純に考えれば、第3通学区で多部制・単位制を1校配置するとすれば、上下伊那の境くらいが通学範囲として一番適当というように考えるのが常識だと思うのです。諏訪地区はいけますから。

ところが、箕輪というのは、はっきり言って上伊那の最北です。要は、下伊那は伊那大島などといっても、伊那大島は下伊那の一番北の端なので、こじつけも甚だしい話なのです。だから要するに、箕輪工業の廃止ありきで、多部制をそこに持ってくるという話なのです。第3通学区へ、多部制をどういう配置にしたらいいかという議論から出ていないから、おかしい議論になっているのですよ。

だから、私がさっきから言うように、県民に分かりやすいというのはそこなのです。箕輪を廃止したいから、箕輪に多部制を持ってくるとはっきり言えばいいのです。それを理屈をつけて、諏訪からも下伊那からも通えますというようなことを言うからおかしくなる。第3通学区に多部制を設けるとすれば、上下伊那の真ん中辺りが一番いいですよ。諏訪は松本へ行けばいいのですから。それは、県民が一番分りやすいということなのです。どうか、わけの分からない理屈だけを言っているのですね。とにかく県教委の案でしようとするのがおかしいのです。

多部制が必要だったらいいのです。一番いいのは上下伊那の真ん中に置けばいいのです。そうすれば、天竜峡からも、箕輪からも通えるではないかという話になるわけです。

(池上委員長)

ご意見として、今の箕輪の立地が、ちょっと地理的に問題があるのではないかということですね。

(熊谷委員)

こじつけはやめてほしいのです。

(池上委員長)

まあ、こじつけているかどうかはあれすれば、意見だというように受け取っています。

(関 委員)

私が先ほどお聞きしたのは、岡谷、諏訪はいいのですが、富士見からですと、むしろ松本地区まで出るよりは、箕輪のほうがいいのではないかということです。そういう意味も

ありまして、そのすみ分けをどのように考えているかという質問をしたのです。

（池上委員長）

そこで、いかがでございますか。それは関委員のご意見は、むしろそういうすみ分けのほうによろしいのではないかという踏み込んだ話が出たのでございますが。

（関 委員）

そうですね。富士見のことも考えれば、箕輪が私は適当だと思います。この案で伊那大島から 41 分となっていますが、もう少し下伊那のほうも考えられるのではないかと思います。

（熊谷委員）

天竜峡から 1 時間半かかってしまう。

（関 委員）

ああ、そうですか。

（池上委員長）

確かにおっしゃる側面は、先ほど藤本委員がおっしゃったこととも考えて、機会を奪うと。だから、重要な問題だと思うのですが、それはそれなりにまた総合的に考えていきましょう。

（川島委員）

すみません。質問というのではなくて、皆さんへの私見という形なのですが。先ほどから、多部制・単位制高校へということで、不登校生の受け皿というようなご意見がありまして、確かにそうだと思うのですが、もう一点お考えいただきたいのは、養護学校の卒業生のことも念頭に置いていただきたいということを思っております。

養護学校の卒業生の中にも、全日制ではちょっと困難ですが、単位制的なものであれば、普通の高校へ通学可能だという子もおりますので、そういった子のことも検討の中に入れていただければなあという希望を持っています。

（池上委員長）

この件では、県はどんなご見解をお持ちなのでございましょうか。

（柳澤教育主幹）

この『最終報告書』にも出ておりますが、「養護学校地域化プラン」というのがございまして、現在更級農業高校に、長野養護学校の分教室が本年度からスタートしております。この地域化プランの中では、それぞれの通学圏域に分教室を設置をしていきたいということで検討が進められているわけですが、この高校改革プランの再編整備と合わせて、このあたりも検討していくということになるだろうかと思います。

また、今、全日制も定時制も含めまして、いわゆる軽度発達障害のお子さんたちも、かなり入学してくるところもございますので、それはどういう選択をするか、あるいは障害の程度によってどういう受け入れ体制をとるかというようなことは、個別に審議をしなければいけないという部分ではありますが、今現在はそんなことを考えております。

(池上委員長)

ありがとうございました。

私もちょっと思い出しまして、ああ、そうだと思ったのは、定時制に行った時に、生徒がとても素直なんですね。肩をたたいても、声をかけても、反応はいいんですよ。ただ、一見して、「これは学力がかなり落ちるな」というふうな感じを受け取っている子どもがございまして、そういう側面で、この子どもたちは就学されているのかなというように、私も感じてまいりましたので、重要な側面だと思われませんが。

ほかに、ご意見ございますか。

(北原曜委員)

これは、お願いというか、資料があったら教えていただきたいのですが。多部制・単位制というのは、非常に柔軟性が大きいわけです。先ほど熊谷委員からもありましたように、非常にイメージがわきにくいということだと思います。総合学科に比べれば、はるかにそういうふうにイメージがわきにくいので、実例として以前お見せいただいた富山県立志貴野高校では、どうもうまくいっているような感じなのですね。だいぶ生徒数も急速に増えていますし、そういうような形でかなり充実もしているようなのですが、ここでも、やはりいろいろ先達の事例ではないですが、「こうやったら成功するだとか、こうやったら失敗した」とか、いろいろと事例があるのではないかと思います。

この高校に限らず、ほかの高校で、多部制・単位制をとったところでも問題点がどういうふうに出てきたかというようなことを、もう少し要覧の抜粋だけではなくて、突っ込んで調べていただけたらなと思うのです。というのは、委員では、これはなかなか調べきれないことだと思うのです。そういう実態を、もう少し知らないと、多部制・単位制へ踏み出していいものだろうか、不安がいっぱいあるわけです。

そういうことで、少しお願いしたいのですが。

(池上委員長)

事務局でご用意できますでしょうか。

(柳澤教育主幹)

幾つかの例を、次回お示しできるかと思っています。

(池上委員長)

ありがとうございます。

もし、時間とかいろいろと制約があると思うのですが、本当は見せていただくチャンスがあれば、それを考えていただくほうがよろしいのではないのでしょうか。

個人的には、教育の問題ですから、どなたかが費用の問題もおっしゃったことがあるのですが、手弁当でやってもそういうことは確認をしたほうが、私は多部制・単位制はどうしてもいいんじゃないかと思っていますが、それは、逆に委員の皆さん、いかがでございましょうか。

確か、志貴野高校の例はここに書いてございましたし、先ほど静岡中央高校のお話もございましたし、いろいろあると思うのですが、どうしても私も、この整理がなかなかつかない。いかがですかね。

（熊谷委員）

はい。ここの委員会の議論の全体がそうだと思いますが、多部制・単位制にしても、総合学科にしても、基本的には、もう導入しますよという方向は決まっていると思うのです。

そのことの是非をここで問うというよりも、その配置をどうするものか、第3通学区でと。そういう議論をするのが、この委員会ではないかなという気が私はしているものですから、さっきから言っているのは、それは箕輪がいいのか、上下伊那の境がいいのかという話をしていると思うのです。

単位制・多部制高校が是か非かという議論、総合学科高校が是か非かという議論というのは、すでに済んでいるという認識でいいのではないかと考えていまして、それをどのように圈内へ配置されるのかという議論がされるべきではないかという気がします。どうもその辺の論点がずれた議論がずうっとされているのではないかという気がするのです、この委員会が設置して3カ月も、4カ月も経つので、もうちょっとその辺の論点整理がされていくべきではないかという気がしているのです。

地域の議論を、言ってみればその辺の高校の配置をどうするのと、前回もありましたが、各通学区で1校減らすとかという議論がもうストレートにされることのほうが、今は求められているのではないかという気がします。

（池上委員長）

受け取り方だと思うのですが、私は必ずしも、前者の話は、そう思っておりませんので、本当にそういうものを採用していくことがいいかどうかという基本に触れるところがしっかり議論がされて、それは何となれば、こういう生徒だけならどうしてもやりたいと、やらないほうがいいというようなところの議論があってしかるべきだと思います。

特に、多部制・単位制は、そここのところを間違うと、また違うことを言ってしまうのではないかという愁いがあるものですから、すっきりとしているというのが今の事実でございします。

何か、志貴野高校だとか、その他の高校の内容について、それでは、もう少し詳細な資料をとっていただくという手法がございしますかね。いかがでしょうか。

（柳澤教育主幹）

志貴野高校の例は前にお出ししましたが、「こういう点はどうか」というようなことがございましたら、また志貴野についても、さらに調査をしてみたいと思いますが、それ以外の学校につきまして、次回は資料をご用意させていただきたいと思っています。

(池上委員長)

ありがとうございます。

(北原曜委員)

志貴野高校の学校要覧の抜粋をしていただいてありがたいのですが、在籍生徒数が 18 名から、142 名にこの 4 年間で急増しているわけです。その内訳といいますか、これは不登校生が非常に増えたその受け皿となっているのか、それとも、もっと違う要因なのか。それから、ここでは、普通科のほかに、情報ビジネス科とか、幾つかの科に分かれていますが、そのことが非常によかった面があるのではないかなと見ているのですが、そういうことについても、学校のほうに問い合わせさせていただくなりして、もう少し情報収集していただけるとありがたいと思います。

(池上委員長)

それでは、今のご意見も入れて、よろしくお願いいたしたいと思います。

(小林委員)

私は、今委員長さんがおっしゃった視察は、基本的に賛成なのですが、できたら、生徒数のエリアがあまり我々の地域とは極端に懸け離れているところは、さっき言った静岡中央とかというところや、富山にしてもちょっと難しいかなと。そうすると山梨県とか限られたところしかないわけですが、それ以上遠いところは難しいなと思います。全員はとても無理だと思いますが、長野県にないものですから、視察はひとつ必要なと思います。

それから、この議論、総合学科もそうですが、それぞれがいろいろ調べたり、考えたりしているものは、とにかく出してもらって、それが本当に可能かどうかということは、いちいちここで議論できないと思うのです。我々は専門家ではないので。それをまさに事務局で検討してもらおうとして、ある程度、こんな構想で考えたらどうかということが必要かと思います。さらに、今熊谷さんがおっしゃったように、そういう学校なら、例えば多部制・単位制なら、そういう方向で考えるなら、第 3 通学区に 1 つではなくて、もう 1 つくらいいいのではないかとことが言えると思うのです。

そうしないと、総合学科も同じだと思うのです。場合によっては、総合学科は、旧通学区 1 校ずつつくっても構わないかなぐらいに私は思っているのですが、それは、財政のことも含めて、どういう総合学科を目指すかによってだと思うのです。だから、あまりできる、できないということをここではせず、やはりある程度、我々自身が抱えている構想の段階で、じゃあ、この第 3 通学区に多部制は 1 校しか無理だと、または 2 校つくったっていいじゃないかという話にいくように議論をしていただければと思います。

以上です。

(池上委員長)

実は、委員長は、今のお話に小林委員が専門家でないとおっしゃれると、私は、はた困ってしまいますので、そうすると、要するに素人の集団が議論をするというような話に相成りますので。最終的には、この多部制・単位制の議論は、本当はもう少し小グループで

議論をしていただいて、それをたたき台として、申し訳ないがこの委員会に出していただくという手法も考えられるかなと実は考えておりました。その理由は、いかにも専門的な感じが多すぎて、なかなか手に負えないという本音の世界と、それにしても我々としても、方向としては間違えないことをしていかななくてはいけないというところで迷っておりまして、できたら、そんな方向で、ちょっと考えさせていただきたいと思っております。

その中で、今小林委員の資料のくだりの中で、後ろのほうで結論をちょうだいしましたし、それから、藤本委員のほうからもちょうだいした。その他の委員の中からもお願いをして、こういうふうな本則でいくべきだと、または、こういう疑問があるということを正面でお出しいただいて、そういうグループをつくらせていただいて、検討していただくという方向に持っていきたいと実は考えていたのですけれども、その点はいかがでございましょうか。特に、ご専門でないというように称している皆さんのほうから、ご意見をちょうだいしたいと思います。

いかがでございしますか。

(小口委員)

私も、多部制・単位制についてはよく分からないのですが、志貴野高校の例を見ますと、雰囲気的には、働いている人の総合学科的な学校だというような雰囲気が、この学校の場合にはしまして、非常に総合学科的に、いろいろな分も取り入れてやっているというような気がしました。

先ほど県の方からも話がありましたように、基本は学習するというようなことで、ただ単に受け皿的なものとする、本当に高校とすれば意味があるのかという話になってくるように思います。

それから県のほうから、どちらかというと生徒数に対して先生が多くかかるというような話もありますし、私は、やはりやたらに多くいろいろなところにつくっていくというよりも、まず一つの事例としてやってみて、それが非常に成功例だとなった場合には、そういう二次的に2ステップ、3ステップということで、ほかの地域にも考えると。しかし、やはりやり方として、こういう形態のように、人気がある、いい「魅力のある学校」に持っていくということに精力をそそいで、それでやってしまったほうがいいのではないかと思います。

全体的な進め方として、そう思いました。

(池上委員長)

今のお話は、設置する場合にも、すぐに深みに入ってくるのではなくて、そろそろ行きましょうという認識でございしますか。

(小口委員)

要は、その「魅力のある」志貴野高校のような学校スタイルにどのように持っていくかということが大事で、今ある発想の延長線上でいくのではなくて、どういうふうに今あるものを変えていけるかということがポイントではないかと思ったのですが。

(池上委員長)

今言っているのは、定時制のお話ということですか。

(小口委員)

そうです。

(池上委員長)

ほかの皆さん、いかがでございますか。丸茂委員、いかがでございますか。この多部制・単位制の話は、かなりご意見もお持ちだと思っているのですけれども、いかがでございますかね。

(丸茂委員)

今、申し上げていいか分からないような意見なので、差し控えておりましたが、多部制・単位制高校の規模ですけれども、規模的にいうと、どちらかというと小規模校の部類になるのではないかと考えています。その小規模校における生徒のやる気を引き出すために、どうしたらいいかということを考えてきましたが、学力考查を行わないでとか、行わずにすべて自己推薦で選抜してみたらどうかとか、例えば、先ほど小林委員さんがおっしゃったように、午前中に集中して教科の授業を行って、午後は体験学習を行ってそのキャリアを身に付けていくというような形にしたらどうかというようなことも、実は同じ意見でしたので、申し上げずにいました。

単位制高校で必要なのではないのかなと思ったのは、e-Learning。これが単位制高校では必要ではないかと考えてきました。先ほど、単位制高校の中で通信制を併修するのはというような話がありましたが、実は、私は反対のことを考えてきていまして、通信制高校の中で単位制高校を併修するのはどうだろうかということを考えました。不登校とか、中途退学者の中の子どもたちの中には、怠学傾向ではない生徒もケアしていかななくてはいいけないと考えたものですから。

長野県以外のところにおいての単位制高校について、先ほどからお話が出ていますが、都立高校では、全日制の中でも単位制を採択している学校も幾つかあって、これから随分増えていくようなことがあるように調べたのですが、長野県がこれから県立高校を再編していく中では、完全に多部制で単位制という設置をしていくのか、それとも全日制の中にも単位制を設置するということを採択していくことも考えられるのかどうかということを、ちょっとお聞きしてみたいなと思うところです。

(池上委員長)

ありがとうございました。

今の点について、事務局でご見解がありましたら、お願いいたします。

(柳澤教育主幹)

全日制の単位制ということでございますが、総合学科の高校は、基本的には単位制で運営されております。それから、『最終報告書』の12ページにも出ておりますが、いろいろなさまざまなタイプの学校について、例えばそこに出ておりますのでは、「進学対応型単位制高校」というような名称で出ておりますが、これはいわゆる全日制の単位制高校というようなことで、前にも出ているということでございます。

これはやはり、それぞれの学校の考え方といいますか、学校運営上単位制に切り替えていきたいということがあれば、十分可能な選択肢だろうと思っております。

(池上委員長)

ありがとうございました。

北原秀樹委員、いかがでございますか。

(北原秀樹委員)

はい。多部制・単位制というのは、たぶん、生徒の多様化に対応するために、こういうものを設けたいということで設置するということになっていると思うのですが、かなり柔軟性あって、どういう形で、どういうふうに設置していくかというのは、私たちには、やはりまだ見えないというところがたくさんあります。午前から午後にまたがっても参加できる。午後から夜にまたがっても参加できるとか、いろいろなことで、今日は午前中、今日は夜ということもいろいろ考えられるわけですが、例えば今、箕輪工業が対象になっているわけですが、工業科があります。ほかの地域には、どういう科があるかちょっと分からないのですが、ほかの地域の多部制・単位制については、どういう科だとかということも含めて、設置されるのかということもよく分かりません。

箕輪工業が、もしこういうふうなら、どういう形で多部制・単位制をしくのかということが、もしシミュレーションでも分かれば教えていただければと思います。そこで、そういうことが出てくると、また意見も言えるのかなということがあります。

それから、やはり地域の人の理解というのがどうしてもないと、これはなかなか難しいかなと思いますので、こういういい面がたくさんあるんだ、こういうことで生徒がもっと勉強するようになるのだというようなメリットが、もっと分かればいいかなと思います。

地元ですので、一番心配しているのは、生徒の動きなどを含めて地域がかなり変わると思います。昼間来て、もう午後から帰っていく生徒がいっぱいいる。また、生徒が登校してくる。そういう雰囲気だとか、状況の変化というのを、もし多部制・単位制をしかれたら、町とか村にとっては大きな問題かなということだと思います。

私ども中学校で、また、今月は箕輪工業との交流会ということで、高校の先生と話をする機会があるわけなのですが、またいろんな話が出るとは思いますが、別に箕輪工業に決まったわけではありませんので、それで、多部制・単位制のことについても、またちょっと聞いてきたいなと思っています。

以上です。

(池上委員長)

はい。ありがとうございました。

その交流は、いつ行われるのでしょうか。10月に入ってからでしょうか。

(北原秀樹委員)

入らないと思います。

(池上委員長)

多部制・単位制についてほかにご意見いかがでございますか

(小林委員)

ちょっとひとつお願いします。

さっきから出ている多部制・単位制のイメージが、大人も、さっきも言ったように子どもが、いったいどういうふうに感じているかということをつかむ必要があります。たまたま、北原秀樹先生が箕輪中にいるので、まったくぶしつけでいいと思いますが、別に箕工にそれを置くとかいうことは関係なくて、多部制・単位制というものを子どもたちはどう受け止めているのか調べてほしい。

さっき言った、多部制・単位制が目指している好きな時に受けるとか、その辺のところも、子どもたちは本当にそういうことを望んでいるのか。無学年制のようなことを望んでいるのかというような、どこかですぐ分かる形で、アンケートを採ってもらえばありがたいなと。一部分的でもいいので。県教委でやっていただいてもいいのですが。

財政的ということで、難しいかね、それは。

総合学科も含めて、あまり箕輪中ではなく本当は別のところが一番いいのですが、いったい子どもたちがどう受け止めているのかというのをつかんでいかないと、ふたを開けたらとんでもないことになっちゃったというのが一番困るので。別に、箕中でなくても結構ですが、どこかでやっていただけますか。

(池上委員長)

今のお話ですと、この委員の中で手短でお願いしようとするれば、総合学科なり、職業科なり、あまり幅が広がりますとまたちょっとピントがぼけるのでしょうか。多部制・単位制というところの話について、アンケートを採ってということについて、今のご提案でございますから。

(藤本委員)

ある程度のデータはあるのではないですか。

(池上委員長)

ございますか。ではどうですかね。私も、見落としていたのですが。

(小林委員)

あります。それは知っていますが、もう少し違う角度でアンケートを。

（池上委員長）

それでは、内容に触れていただかないとですね。

（柳澤教育主幹）

第4回の資料だったかと思いますが、中学3年生アンケートのことですね。平成15年6月に実施したものでございます。およそ2,700名程度を対象にした全県の中学校の、地域バランス等々を考えて抽出した生徒でございます。その3ページのところに、「どのような高校があってほしいですか」という選択の中に、総合学科の場合ですと、「普通科目や職業科目の中から、興味、関心や、進路希望で選択する総合学科高校」、これが24.1%と3番目に多くなっております。その次の4番目に、「自分の好きな時間帯を選び、興味、関心や、進路希望で科目選択する多部制・単位制高校」、これは24%という比率です。

ちなみに、一番多かったのは、「分からない教科と内容を、もう一度基礎から分かりやすく学ぶことのできる高校」ということで、これが44.7%というように、中学3年生、長野県全県の抽出でのアンケートの結果をお出ししてございます。

（池上委員長）

ありがとうございました。

（藤本委員）

我々もそうですし、委員の皆さんもそうだと思うのですが、今までの学年制と、大きく変わっている単位制との違いを、きちんとしなければいけないのではないかなと。そのところのポイントが、私たちはずれているのではないかという気がするのです。

やはり、単位制が、これから子どもたちの新しい魅力に、多様化に対応できるのか、←そうはいつでも、我々が積み重ねてきた学年制がいいのか、これからの多様化した生徒には、単位制のよさもあるのではないかと。その辺を、確認しなければいけないと思います。

私が今回、「総合学科の系列、原則履修科目とは」という資料をご提出しました、その2ページ目のところに、そのことをちょっと書いておきました。我々もちょっと確認しておいたほうがいいのではないかなと思うのです。

総合学科も、多部制もそうですが、単位制というのは、履修と修得が一致しないわけですね。履修というのは、はっきり言えば、3分の2出れば履修になるわけです。しかし、修得にはならない。修得というのは、その科目を理解したと認められると修得なのです。だから、履修と修得が一致しないので、適当に単位を選んで、修得をすればいいということです。

その点、右側にあります、既存の職業高校、普通高校は学年制ですので、履修と修得がきちんと原則的に一致している。すなわち、出席を満たしても、ちゃんとその授業を理解したという修得が認められなければ、次の学年に進めない。だから、我々が今までやってきた学年制というのは、一つ一つ、そこに書いてありますが、学年進行に合わせながら、

系統的に学習を修得しながら積み上げていく。これが、今までの既存の多くの学校であったわけです。確かにまずい点もありまして、1 単位でも修得できないと原級留置ですので、現在はほとんどそんなことはなく、3 月、2 月ごろに、集中的に我々は補習授業をして、何とか修得させているわけです。

でも、そういう1 科目でも単位が認められないと、原級留置という問題は確かにあるわけですが。それでは、単位制はどうかというと、その左側に書いてありますが、生徒の自主性を尊重して、興味、関心によって、多様な科目の中から、自分が選択して、自分の責任で積み上げていくということになるわけです。私は、若干、やはり学年制のよさも取り入れた方がいいのではないかという気はしているわけです。

2 ページの最後のところに結論的に書きましたが、やはり従来の学年制に変わって、新たな単位制の学校を設置するということは、総合学科もそうですし、多部制もそうですが、学年制ではない問題点があるわけです。問題点はあるけれども、そうはいつでも多様化した生徒の自主性として、新たな魅力になるのか、後期中等教育をきちんと、学年制で積み上げていくことが必要なのか。そのところで、学年制か、単位制か議論する必要があると思います。

新たな、生徒の魅力ということで、単位制をこれからは認めないわけではないわけです。履修と修得、その辺の単位制と学年制の違いを、ちょっと頭に置いていただきたいと思います。

(池上委員長)

ありがとうございます。

さらに専門的で、私にはよく分かりませんが、いずれにしても視点を変えるという話についてのご意見でございます。

先に、先ほどのアンケートの話ですが、こういう方向でいかがでしょうか。事務局で、小林委員提案のアンケートの対応はお願いできませんでしょうか。対象校は、例えば素上伊那地域が入って来ますし、ある程度の内容は、今の小林委員のご趣旨を斟酌させていただき、アンケートを作っていただいて、しかもコピーだということは、いかがでございますか。

(柳澤教育主幹)

具体的に、どのような中身のアンケート調査をというような、ちょっと今、もう少し明確にお願いできればと思いますが。

(池上委員長)

そうすると、小林委員、いかがでございますか。

(小林委員)

ここで、私が言い出しっぱなので、一応こんなアンケートを作っていただければというのを、後でお示しして、そこから県のほうで直すなりしていただければと思います。「一つ一つ、これを、これを」というのは、今この時間のないところで言えませんので。さっ

きのアンケートではなく、もう少し絞り込んだ形でできたらと思います。そういう意味で、もしお許しいただければ、私のほうで案を出してやってもいいのですが、まずければ撤回しても結構です。

（池上委員長）

どのくらいの時間でお願いできますか。

（柳澤教育主幹）

よろしいですか。先ほどの中学２年生、３年生のアンケートもございますので、そういったことを参考にさせていただけるならば、それを活用していただければというふうにも思いますが。また、あらためてこの時期に、各中学校なりへのアンケート、またその集約、活用方法等々、ちょっと中身の問題もありますが、もし既存のもので間に合う分であれば、そちらのほうでご活用いただければと思っております。

（池上委員長）

いいでしょうか。

（小林委員）

よく考えてみると、それを県にお願いするということは、どこか特定の学校というわけにはいかないと思うので、いくつか抽出するということになると、結果が分かるのにはちょっと時間がかかると思うのです。それはそれで、我々がすぐ欲しいからというわけにはいかないのも、やはりもう少し具体的な形でやっていただくのはいいのですが、今の私の望んでいることが難しいのなら、私の管轄地の辰野中学あたりに協力していただいて、あくまでもそれは参考にしかすぎませんが、ちょっと箕中にやっていただくというのは、いろいろな事情から無理だなと思います。私のところでやってみて、子どもたちがどんな反応するかと、あくまで私の考えのアンケートですが、という形に変えますので、すみません。

（池上委員長）

わかりました。それでは、そういう方向で、よろしいと思いますので。よろしゅうございますね。

今の藤本委員のご提言でございますが、そこが一つのポイントですねということは、よく分かりました。この点についても、やはりまだ盛り込んで取り組まなければいけない問題だなという認識であります。

それで、少しくどくなりますが、できましたら、こういうお願いを事務局とも打ち合わせをして、やらせていただきたいと考えているのですが、先ほど申し上げましたように、この多部制・単位制については、極めて専門的な領域が多いですし、いろいろ、いわゆる教育的な側面からの問題点が多いと思いますので、できましたら、一つのグループを形成させていただいて、そこでたたき台等をつくっていただくような方向に持ち込んでいきたいと思うのですけれど。特にご異議がなければ、そんなことを考えておりますが、いかがでございましょうか。

委員の皆さま、いかがでございましょうか。関委員、いかがですかね。

（関 委員）

ちょっと、イメージがわからないのですね。この委員の中から、いくつかに分けるということでしょうか。

（池上委員長）

そうですね、一番の問題は、どうも多部制・単位制が全体の影響量としてはそう大きいかどうか分かりませんが、一番難しい側面を持っているということで、柱としては、たぶん将来は総合学科も入ってくるでしょう。取りあえず多部制・単位制だけ、小グループで議論をいただいて、そこでたたき台を挙げていただくと大変ありがたいなということでございます。

（関 委員）

いくつかのグループとは、それぞれ異なる結論が出て・・・。

（池上委員長）

小委員会毎に（案）としてペーパーとして出してもらおうことを考えています。

（関 委員）

ペーパーとしてですか。

それはいいかと思います。

ただ、まだ多部制・単位制については、「ここへ設置して、それからどうする」と細かいところが決まっておりませんので、今後つくっていく過程で細かいところを決めていく部分もあるかと思います。

ですから、基本的に、本当に委員の皆さん全員が、細かいところまで全部承知しなければゴーサインがでないという、そういう考え方だと、ちょっと前へ進まないがなと思いますので。本当に、大まかなイメージで私たちは考えていくしかしようがないのではないと思います。

そこにある問題点というのは、今後、つくっていく過程で検討していくということだと思うのですが。

（池上委員長）

事務局、いかがでございましょうか。そういう、私は考え方を持っていますが。

（柳澤教育主幹）

今のグループの提案でございましょうか。

それは、この委員の皆さんのお考えということだと思います。

基本的に私も、初回の時に、検討依頼事項でお願いしましたように、その 1 項目にございますが、総合学科と多部制・単位制高校につきましては、各通学区に 1 校を配置と。

その配置についてご検討いただきたいという願いをしているわけございまして、先ほどもちょっと委員長さんのほうから出ました多部制・単位制についての検討委員会は、平成 14 年に立ち上がりまして、やはり県内外のさまざまな委員さん方によりまして検討がなされまして、平成 15 年の 6 月に報告をいただいたと。通常ですと、そういう報告に基づいて、既に多部制・単位制が設置をされてくるというのが通例でございますが、それが、ちょうどこの高校改革プラン検討委員会が立ち上がるということになりまして、方向付けは多部制・単位制等検討委員会を出されて、それを引き継いでこの検討委員会に来た。検討委員会のほうでも、この『最終報告書』にありますように、「ニーズの高い学校であるが、ほうっておいてもできない学校」だと。従って、総合学科と、多部制・単位制については、行政の責任で、各通学区 1 校以上配置が望ましいという提言をいただいたということでございます。

従って、私どもの候補案の中では、それぞれの通学区 1 校ずつ配置をとということでお願いをしたということでございますので、その中身等につきましては、今、関委員さんからもございましたが、つくっていく段階で、細かいことは、カリキュラムをどうするだとかいう問題につきましては、つくっていく段階で議論を進めながら準備していく必要があるというふうに思います。この推進委員会の中では、この配置についてにどういうことになるのか、あるいは総合学科、南信につくる多部制・単位制については、このようなイメージだと、そういうまたアイデアをいただければと思っている次第でございます。

（池上委員長）

はい、当然のことだと思います。

小口委員、いかがですかね。

（小口委員）

ぜひ、なかなかこの全体の会議で進めていくには、意見も知識の温度差があるようでございますので、やはり委員長さんがおっしゃるように、ある程度そういう特審会的な形にして、目指すイメージがよくわかるようにしながら進めていくと。そういうことがいいのではないかなと思いますね。

（池上委員長）

ほかの委員のみなさん、いかがでございましょうか。

（藤本委員）

各委員さんが、ある程度たたき台をお持ちだと思うので、この委員会での方向づけでは、問題があるのでしょうか。

（池上委員長）

いや、結構だと思いますけれどもね。

(藤本委員)

やはり、特別委員会のほうがいいでしょうか。各委員さんがそれぞれのたたき台をこの場に出すのでは。

(池上委員長)

そのまま申し上げますと、先生方は、まず小口委員が今おっしゃいましたように、考え方のベースが一応あって、従来の姿も、今日の現代の姿がよく理解をされているということに考えるのですが、我々は、ここに入ってまいりまして、それについての知識は、ほとんど皆無に近かったということもありまして、そこに追いつくにはなかなか大変だなということもありますし、いかにも専門的な世界が多過ぎるということもありまして、できたら、ご専門の皆さんにチームを組んでいただいて、そこでたたき台をつくっていただいてご提出をいただいて、我々は検討させていただくという、ややずるい手法ではありますが、その時にはまたよろしくお願ひしたいと思います。

(小林委員)

よろしいですか。

私も、基本的には小口委員のおっしゃることに賛成で、とにかくこれを進めていくには、基本的な、構想的なことをここで検討するのが我々の仕事かなと思うのです。だから、そこまでいくのに、まだはっきりしないところは何なのかというのは、みんないろいろ差がありますよね。そうすると、この大きなところで話し合っても非常に非効率なところがあるので、やはり小さいグループで、その辺をしっかりと、今の基本的なことに、例えば、私はああいう案を出したのですが、いや、そういう案ではなくて、こういうのはどういうものかというものを出し合ってもらって、そして全体のところで、じゃあ、こういうふう考えたけれども、これが果たして可能なのかどうかは議論してもらって進めたほうがいいと思います。特に単位制・多部制というのは県下にも初めてのことで、お互いが本当に理解して進めていくという意味では、そういうことが必要かなと思います。

(熊谷委員)

それが、いまいち分からないのですが、この『最終報告』で 20 ページに、多部制・単位制の考え方については整理されているはずですが、この委員会として、第 3 通学区には、この 20 ページの考え方を採用するか、しないかという検討をするということなのでしょうか。

(池上委員長)

最終的には当然そういう議論になると思うのですが、その前に申し上げますが、委員長はこの案件について、相当の時間を費やさないと実際は理解できないという立場にございまして、手っ取り早く学校を見せていただくということをいたしました、なかなかこれは難しい判断だなというふうにますます思ったりいたして、そういうことで、専門家の皆さま方に先にご検討いただいて、ぜひたたき台を出していただきたいということでございます。

(熊谷委員)

要するに、この第3通学区に多部制・単位制を置くことは、いいか、どうかという検討をするという委員会という・・・

(池上委員長)

それもございます。それは当然、委員会です必要なと思いますが、その前に、どういう姿になっていったら、どこに問題があって、だからこれからどうするのだというようなところを、やはりまとめていただくのは、ご専門の皆さんにまとめていただくほうがいいのではないかと思います。ほとんどが教育的な側面であって、他の委員が介入してどうだろうという世界はかなり少ないのではないかと私は判断をしています。

例えば、総合学科の場合ですと、それは違うと。それは、たぶん皆さんがかなり議論していかないと思うのですが、ここの世界はちょっと違うのではないかなという、私は認識を持っておりましたので、そんなご提案を申し上げたということでございます。

それでは、そういう方向で考えさせていただきますので、また副委員長とも相談をさせていただいて、いい考え方でまとめてききたいと思いますので、ご了解をいただきたいとします。

だんだん時間が過ぎてまいりましたので、実は、私のほうは承知しておりますが、経営者協会(社団法人長野県経営者協会)が提言(「長野県高校改革プランに関する要望」)をしておりますので、ちょっと小口委員、概要をご説明ください。

(小口委員)

今月の9日に、経営者協会の安川会長から、長野県の田中知事に高校プランに関する要望書が出されたということであります。

大ざっぱに、各項目を説明いたしますと、1つ目が、非常に重大な課題なので、ぜひ県の教育委員会に一層のリーダーシップをお願いしたいというのが1点。

それから2点目は、案について、「白紙撤回」という意見が出されましたが、これは「たたき台」ということですので、白紙撤回の必要はないのではないかと経営者協会としては考えますというのが2点目。

それから3点目は、財政・教育予算面での資料を、もっと県民などにも出しながら、やはりそういう方向性を持ってやっていただきたいということが3点目。

それから4点目は、新しい学校の姿、今回も論じられておりますが、多部制・単位制、あるいは総合学科、それから中高一貫、e-Learningなどいろいろありますが、そういうものがどういうものなのかというのが、なかなか県民に伝わっていないと。ぜひそういう部分もよく分析してやっていただきたいというのが4点目。

それから5点目は、「魅力ある」一助として、企業も大いに協力をしたいということでありまして、これが5点目。

それから6点目は、やはり非常に重要な問題なので、拙速にならずに十分な理解のための時間をとっていただきたいというのが6点目。

それから7点目は、高校改革も必要ですが、その前に、家庭や地域の子どもに対する育て方、例えばしつけだとかというようなものも、ぜひ論じていただきたい。

こういう7つの要望が出されております。
以上です。

(池上委員長)

ありがとうございました。

それでは、ほかに藤本委員のほうから資料のご提出をいただいております。それは、継続してまた検討に資していただくということで、それによろしくございますか。

(藤本委員)

それではちょっとだけ。前回、各通学区1校減ということで検討しようということでまとめたわけですが、県教委から本当はこういう計算資料をきちんと出してほしいと何回も言ったのですが、なかなか出していただけなかったので、県教委の総数決定基準によって学校数の推定をしました。

その結果が、1ページにあります。県教委の決定基準をチェックしたという意味なのですけれども、前回決定した、1校、1校、1校減というのが、何となく、そうかなと。上伊那に限って言えば、2校減というのはとてもきびしい、そんな気がしましたので、また読んでおいていただければと思います。

(池上委員長)

ありがとうございました。

ほかに、ございますか。よろしくございますか。

それでは、時間がまいりましたので、次回の計画について、事務局からお願いします。

(野村主幹教育支援主事)

はい。よろしくお願いします。

次回の日程につきましては、10月11日火曜日あたりを考えております。会場につきましては、まだ見つけれられておりませんので、後日ということになりますが、委員長とも相談の上で、また、あらためてご連絡申し上げたいと思います。よろしくお願いいたします。

机上に日程表を置かせていただきましたが、まだ未送信といいますが、11月、12月の分につきましては、送られていない方は、ぜひお送りいただければと思います。

それから、本日は、先ほど申し上げましたが、この後授業参観ができるようになっておりますので、また学校の方にご案内していただくようになると思いますが、終了したところをお願いしたいと思います。

以上であります。

(池上委員長)

ありがとうございました。

大変お忙しいところを熱心にご討議いただきまして、ありがとうございました。

では、午後も移動して、視察に入りたいと思っております。よろしくお願いします。

ありがとうございました。